

【連載】

老健仕事人 介護支援専門員

施設ケアマネジャーの業務 葛藤と喜びのなかで

左：菊池洋志 [まくち・ひろし]

右：古川貴子 [ふるかわ・たかこ]

介護老人保健施設やすらぎの里八州苑（栃木県）



はじめに

“施設ケアマネ・仕事内容”を検索すると「ご利用者、ご家族の意向を取り入れ、一人ひとりに合わせたケアプランを作成すること」と出てきます。実際の仕事は多岐にわたり、日々葛藤し悩みながらどのようなサービスを提供すればよいのかを常にチームで議論しています。

ときにはヒートアップすることもあります。達成感や喜びを感じながら仕事をしています。その思いを今回、少しでも言葉にできたらと考え、執筆依頼をお受けすることにしました。

施設紹介

当施設のケアマネジャーは、現場との兼務を前提に計6名で担当しています。入所～退所までの書類作成や、ご利用者宅および医療機関への訪問。在宅復帰や看取り支援への調整。ご利用者、ご家族への対応。ベッドコントロールも含め多職種との連携調整や、後進の教育等幅広く業務にあたっています。このなかで、最も重要な業務の1つがベッドコントロールです。

稼働率を維持するための工夫

当施設では、超強化型老健施設として在宅復帰率だけでなく高い稼働率も常に意識しており、同月に入所と退所の人数が同程度となるよう調整を図っています。

稼働率の維持にあたり重要な点は、当法人の医療機関は無床診療所のみであるため、他医療機関から退院されるケースでご相談があったときにスピード感をもって対応することが求められます。さらに、医療機関だけでなく、居宅介護支援事業所や地域包括支援センターと連携する際もできるだけ速やかに対応できるよう心がけています。

事例を紹介しながら具体的に説明します。

夫が亡くなってから長く一人暮らしをしている要支援2の90代の女性。遠方に住む息子さんが会いに行くと、いままでできていた排泄、食事など身の回りのことができなくなっておりました。息子さんは長期的にこちらにすることが困難なため、途方に暮れて地域包括支援センターを経由され、区分変更申請後に当施設へ相談がありました。

迅速な対応が求められていたため相談から5日程度で入所していただき、息子さんは安心してご自宅に戻られました。このような事例に可能な限り早く対応していくことで、連携先からの信頼を得ることができると考えています。

在宅復帰への支援

最近では老健施設からの在宅復帰で、地理的要因が制約になることが増えてきました。当施設では自治体を超えて入所されるケースが比較的多く、地域密着型サービスが利用できずに柔軟なご提案ができなかったケースについて紹介します。

要介護4の妻と高齢の夫の2人暮らし。隣の自治